

風と共にあれ

ネマ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

……死ねない彼が紡ぐ物語

それを支えるは幾多の精霊。

幸せをミツケル物語

f  
i  
r  
s  
t

# 目次

1



## f i r s t

「……………」

ザッザッザッ。

砂漠をひたすらに歩く。

まるでムスペルヘイムの如きの灼熱と、太陽が照りつけるが原点のスルトの方が熱かったかと、苦笑する。

……何日歩いただろうか。

最早数えることすら億劫に成る程歩き続けた気がする。

メソポタミアのウルク。イスラエルのイエルサレム。北欧のヴォルフガンク・サガ。ローマの王。ブリテンの騎士王。アッティラ・ザ・フンの文明の破壊者。

……かつて神が全てを統べ、始まりの神が跋扈している世界から私はその生を繋いでいる。

『お前は転生ね。あ。2つ恩恵は付けとくから。』

そう言われて、苦情を告げる間も無く私は、不毛の大地に立っていた。

そこには龍が覇権を競い、神が世界のテクスチャを作り領土を奪い合ういわば、”人

類創成前の地球だった”。

人は神に、力有るものに乞ひ一日を生きていた。

私が最初に崇めた” ティアマト様 も痲癩さえ有れど心優しく人の痛みにすら涙を流す優しい女神様だった。

同じ様に崇めていた” アプスー様 も多少頭痛でイライラしていた時も有ったが信者には優しく笑っていた理想の神だった。

それでも終わりの時が来る。

私は、特異な魂を持つ人としてアプスー様にもティアマト様にも気に入られていた。ちようどその時は産んだ息子、娘達の馬鹿騒ぎに苛立っていたが私が献上するフルーツ等で少しは怒りが治まっていると思いたい。

ある時、息子である” エア様” にアプスー様は騙され殺されてしまう。

ティアマト様もそれを知ってか（殺されるまで知らなかった）聞かせていただいた唄には悲しみが混じっていた。

だが息子、娘達はそれだけでは飽きたらずまさかのティアマト様にも刃を向けた。

勿論私もティアマト様も怒り狂い、ティアマト様は海水の権能全てを使い十一もの魔獣を持つて若い神に戦いを挑んだ。

私も、信仰とお供えとそれに気に入られている事も有ってか神代のそれも始まりの魔

術のさらに前の権能と言われるレベルのまさに”魔法”を教えてもらっていたからそれを使ってティアマト様を最大限バックアップした。実際前線に出たことも有る。

それでもティアマト様は敗れ、私が最後に見たのは、確実に敗れると察したのだろう。海水の権能によって私が封じ込められていた時にはもうマルドゥーク神がティアマト様を天と地に引き裂かれた後だった。

私は、その後マルドゥーク様に捕まり後の余生は若い神を信仰するようにされてしまった。

次に目を覚ましたのは、ギリシヤのそれもまたクロノス様の時代だった。

この頃になってようやく私は自分の転生特典に気がついた。

転生特典は言われた通りに2つ。

『無限転生』と『完全記憶』

だと思ふ。

もしかしたら、『完全記憶』では無く、”あらゆる魔術の使用”なのかもしれないが、過ぎた話だ。

まあクロノス様は、父殺しによって最高神の位を受け継いでおり、いずれ自分の息子に同じ様に位を奪われるだろうと言われていた。

だから、どれほど傲慢に人に接していてもその中は恐れと不安を抱いていたと思う。

それでもクロノス様には終わりが必ず来てしまった。

最後にもう逃げられないと悟りゼウス様に微笑んだのは父親としての最後の愛情だったのだろうか。

その後、私は色んな物語を見た。

始まりの黄金にして偉大なる王。

愛によって死んだ北欧の英傑と戦乙女。

半神と言う立場で有ろうとも自らを犬と定義した英傑。

それはいたいけな優しい褐色の少女が歪められ男として終わりを迎えた英傑。

咎を背負いながらも、十二の難題をやり遂げた英雄。

常勝の王で合ったけど、その心は本来なら優しい騎士王。

ここで語るなら時間が足りなくなるような、時間を英傑と英雄と過ごしてきた。

……ああ。もう時間だろう。

神代に産まれることは無い。

ギルガメツシュ王がまず天と地の楔を切り落とし、信仰心の欠けりにより、もう神はこの世界に降りることは無いだろう。

私が居る袋はもう縮み始めている。

私がこの世界に産まれるのだろうか。

ああ。ジャックは、あの憐れな水子霊達は報われたのだろうか。

産まれる前はこんな事を考えるなんて縁起が悪いぞと誰かに笑われた気がする。

……誰だったのだろうか。

オギヤアホギヤアオギヤア!!

……口から意識しずとも出る泣き声。

産まれて初めて酸素を吸い始めた。

……いやまあ。こうやって生まれたのは数えきれないが。

「産まれたのか!!」

「ええ。あなた。可愛い可愛い男の子ですよ。」

「……………」

「お兄ちゃん!起きてー!!もうあの二人来てるよ?」

「……………はいよ。先行つといてって言って。」

「はーはーはーい!」

目が醒めた。

久しく、夢を見ることは無かったが、久しぶりに記憶のフィードバックが来たらしい。

目を擦りながら、服を着替え制服とやらを着る。……ここ数年を見るところに大分世界は変わってしまった。

かつて麻で編んでいたのが毛糸になり、綿や絹となり、今は人工的に素材が作られている。

人は進化した。もはや神の手を借りず、進化し過ぎた。

あの頃、神獣が跋扈し私達が命を掛けて生き、駆け抜けたあの頃が懐かしく哀愁が沸く。

「……………行くか。」

リビングに降りると、妹と幼馴染の双子が、テレビを見ていた。

「……………なにやってんの？」

「……………テレビ見てる？」

「回答。テレビを見ている？」

……………どうやら聞いた私が馬鹿だったらしい。

とりあえず家族の紹介をしよう。

妹である。柚奈。

そして……………ほぼ居候と化している八舞耶俱矢と八舞夕弦だ。

私はまとめて八舞姉妹と読んでいるが。

何でこの二人が居候と化しているかと言うと……

簡単に言うと、拾ったのだ。空腹で倒れている所を。

そしたら懐かれてしまって、このままと言うわけだ。

……実際。この姉妹が純正の人間では無いことは察しているし知っている。

まあこの種族に名前を付けるのなら”デミフェアリー”辺りが順当だろう。

その力は幻想種のフェアリーでは無く、拳大の結晶。それが、精霊の力の元らしい。

そしてこの結晶には面白い能力が付与されていて、……そうだな名を付けるのなら

”模造天使”だろうか。

中に刻まれている能力は”風を操る事”。

神造兵器の世界を繋ぐ錨程の威力は出ないだろうが、魔術で起こした風とは大きな差が出るほどだ。

……え？親はどうしたかって？まあ、あれだよ。あれ。星の形になったのさ。

「……うむ！相変わらず恭夜のご飯は美味しいな!!」

「同感……洋中和全て完璧に作れるのは感動します。」

まあ。遙か昔からの年の瀬だろう。

一応、ある程度有名な所のご飯は作れる。

「……………それで。今日はどうするんだ？八舞姉妹。？」

「……………恭夜は学校だろう？」

「まあ今日は休めないからな。」

「疑問。なぜでしょうか？」

「ああ。……………今日はクラス換えの日だからな。」

「理解。それじゃあ、もう家を出る？」

「ああ……………もうこんな時間か。行ってくる。」

「……………行つてらっしゃい〜」

……………妹は今日は休み。八舞姉妹は……………知らないがまあ何かしらしてまた渡り鳥の宿り木の如くあの家に来るだろう。

「おはよう！恭夜！」

「……………ああ。おはよう。土道。」

後ろから来たのは、長い青髪を無造作に括って、人当たりがよさそうな笑顔を向けた少女だった。

「どうした？そんなに、疲れたような空気を出して。」

「……………え？実は……………」

どうやら土道が言うには、朝起きたら土道の妹である琴里が腹の上においてサンバを

踊っていた……らしい。

「まあ良いじゃないか。仲良くて。大目に見てやれよ……」

「まあそのつもりだけどさ……もう少し起こし方よ……」

少しブックサ文句を言いながらも学校に着いた。

「………2年4組か。」

「……恭夜はどこ?……あつ!一緒じゃん!!」

教室に入り、黒板に張られている座席表を見る。

「………時雨恭夜。」

突然、後ろから名前を呼ばれ振り向くと、そこには銀髪の髪を肩辺りまで伸ばした無表情の少女が立っていた。

「………誰?」

「知り合いじゃ………無さそうだね。」

実際、今世の記憶上にこの少女の顔は無い。

「覚えてないの?」

「………すまん。さっぱりだ。」

「………そう。」

一言呟くと、自分の席に座って本を読み初めた。

「とうっ!!」

後ろから、背中を軽く叩く感じがして後ろを振り向くと、少年が立っていた。

「……何の様だ? 殿町?」

「お前……いつの間に鳶一と仲良くなりやがった!」

「……鳶一?」

「今さっきの子だと思うよ? 恭夜?」

「……そうなのか? 殿町?」

「どうやら今さっきの少女は”鳶一折紙”学年首位で全国模試一位、体育も優秀であげくのはてには美人で恋人にしたいランキング・ベスト13で3位らしい。」

「……3位ねえ。と言うか13位とは随分と中途半端な」

「魔術……と言うかこちら側の世界では、13と言うのはもっとも重要な数字の一つでもある。」

「と言っても聖堂協会の方が重要にしている。神の子キリストの13番目の弟子そしてキリストを裏切った神の子を殺す直接の原因である”ユダ”を意味する。」

「その為、13とは”奇蹟”を阻害する等とある。」

「洗礼詠唱等は、これで塞いだりする事は出来なくはない。」

……まあ。もつとも圧倒的、魔術で先に口を封じた方が早い。

「主催者が13位だったんだよ。」

「成る程……」

「ちなみに男子はベスト358まで発表だ」

「そこまで明かす必要はあったか？」

「ちなみに恭夜お前は4位だったぞ？」

「ふうん……でお前は？」

「358位だが？」

「主催者を把握出来たな。」

軽口を叩きあっていると、教室のドアが開き教師が入ってきた。

今年の担任は岡峰珠恵、通称タマちゃん担任となり始業式も無事終わる。

そしてショートタイムが終わり、全員解散となった頃……

(……………? マナの歪みがひどい?)

ウウウウウウウ

「……やれやれ。空間震か」

空間震、空間の地震と称されている。現在起こる理由に発生時期不明とよくわかっていないもの。しかしシエルターに避難すれば問題ない。しかもここは学校、地下にシエ

ルターが完備されているのでなにも問題ない。

魔術的観点から見るところ。 ” 何か ” が顕現したかのような……それこそ神靈級には及ばないが、幻想種のような何か ” 世界の裏側 ” から来たような……って

「おいつ！五河どこに行くんだ!？」

「……ちよつと用事!!」

本来、避難しなくてはならない現状だが、土道はまるで関係無いような感じで走り去っていく。

「………つく。殿町。あいつを連れ戻してくる。先行つてろ。」

返答は聞かず、追いかけて走っていく。

「ボソツ………Im Laufe der Zeit folge mir und versammle dich bei mir」

” 時の流れよ我に従い我に集え ” 。

かの有名な魔術師殺しのエミヤの術式に似た。自分と世界の時の流れを弄り、自分を速くしたり遅くしたりと自由に操れるから気に入っている術式だ。

因みに、これは抑止力案件では有るが、 ” 何故か ” 今世では弱体化していない。

………これぐらいなら ” 強化 ” で良いんじゃないかとも思った。

「………成る程。空間震の正体は ” デミフェアリー ” だったのか。」

そこには、少女が一人佇んでいた。振り回すには少しデカイ大剣を持って。

「……………！つて危ないなあ……………」

「まさか弾くとは思わなかったぞ。」

「……………相手は殺る気か……………はあ……………こんなの柄じゃないんだけどなあ……………」

「何をブツクサ言っている？」

目の前の少女は顔をしかめるがこちらを確実に葬り去るために片手剣は振り下ろし初めている。

「Alles Training……………」